

室伏鴻氏のご逝去の報に接し、謹んで弔意を呈し哀悼の意を表します。

振付家・舞踏家として舞台芸術への功績、

そして、横浜ダンスコレクション・コンペティション審査員として、若手振付家・ダンサーへの多大なる激励に感謝申し上げます。

### 室伏鴻氏 コンペティション審査講評 (2011年～2015年)

2015年

横浜ダンスコレクション EX2015 コンペティション I 審査の後、パリへ来ています。

仏国立ダンスセンター、CND (Centre national de la Danse)のスタジオでインターナショナルな14人の若いダンサーたちとの新作『真夜中のニジンスキー』(本年12月パリのLa Villetteで初演予定)の振付・稽古を始めたところです。そのCNDの発行する『recherches』叢書からSilviane PAGESの『Le buto en France - malentendus et fascination』が刊行されたばかり。日本語への翻訳刊行が早急に望まれる労作だ。

さて、パリにいて切実に、「パリも危ない、日本はさらに危ない・・・」と思う。

横浜ダンスコレクション20周年、<ダンスの身体>は今こそ他者へと開かれる必要がある。今こそ、ダンスの混成、踊る身体の変形から学ばねばならぬ。

相互に<危うさ>を。自らの身体が、最初の<他者>であり<異物>なのだ・・・。

同一性の神話から限りなく遠く、<外れてあること>、それが踊ること。

室伏 鴻 (舞踏家・振付家)

2014年

今年は韓国勢が圧倒した。

確かに、例年の韓国の「情調に流れるテクニク」という印象を超えて、「自己批評的な切実な危機感」が、キム・ボラの『A long talk to oneself』からも、キム・ボラムの『Mistake』からも、在日フランス大使館賞のクォン・リョンウンの『The Skill for me』からも感じられた。

ダンスを抑制して踊られた強度、それが彼らの身体の切実な危機感として露わになった。

Masdanza 賞の三東瑠璃『ESQUISSE』、奨励賞の井上大輔『百年の身体』が日本勢では奮闘したのだが、むしろ今、日本こそ安易な表現=自己実現への信頼から切断された切実な身体による実験や冒険が露わになるときのように思うが、それは巷に潜んでいるのであろうか。

室伏 鴻 (舞踏家・振付家)

## 2013年

授賞式で私が言ったのは「もっとワイルドで繊細に」であった。しかし人の道を踏み外すほどの素敵で野蛮なダンスは、ダンコレに応募などして来ない・・・。

いや、どこか余所で勝手に火花を散らしているのかも。その<余所>とは何処かといえば、今回の応募者全員の<未来の身体>であるだろう。

3年間同じメンバーでの審査であったが、応募作の水準が高くなっているという意見で一致、じっさい激戦であった。それに海外のキュレーターの客人たちの顔ぶれも継続して来浜し、さらに拡大しているように思われた。

新たに船出をした新人たちが受賞を機にさらに国内・外の荒波にもまれ、新しい時代の要になってゆくことが希望であろう。

室伏 鴻（舞踏家・振付家）

## 2012年

ダンスを「踏み外して踊る」身体を見たい。

しかし、賞を一つの“切っ掛け”＝幸運の場として、挑戦する身体（の潔さ）には優劣はない筈だ。個人的な総括を言えば、「ダンスは（終わることなき）冒険、実験である」ということが、昨年よりも更に後退して、忘れられつつあるのか、と疑わせる結果であった。

それを見届けることの重責を更に感じた 2年目でした。

室伏 鴻（舞踏家・振付家）

## 2011年

審査を終えてやって来たロンドンのイーストエンドでのワークショップで未熟なダンサーたちに接しながら<東日本大地震>のニュースに接しました・・・

絶対的な悲愁、そして宇宙的郷愁。ダンスはいつでもカタチなき生命の、カタチとの攻めから、すでに崩壊するシルシとともに歩んでいる<不様なカタチ>を愛するものでもあれば、生成するカタチの<発見へのヌカヨロコビ>でもあるだろう。どこかで不定形な生命にとどめを刺さねばならないとする不遜で健気な努力は皆、すばらしい<破天荒なもの>となるはずであった。もはやダンスであるべきではないのだ。力不足というほかはあるまい。

いまだ位置の定まらぬ流動と移動、それがコンテンポラリーダンスならば既成のダンスの枠を踏み外してゆく意欲と力、それが評価の基準であり、11組を選出したときにすでに無理な注文には答えたつもりであった。すでに評価を得て将来的にも約束されたと思われるものよりは、いまだ覚束ないくになにものか>に賞は行くべきであった。次に期待と希望を。

室伏 鴻（舞踏家・振付家）

Paris 2011/03/15